

しゅう 会 衆

■ 楽曲データ

歌詞：羽田野仁 作詞

楽曲：平井康三郎 作曲

発表：仏教音楽協会 1935年

初演：「第七回聖歌発表演奏会」 1935年11月23日 東京音楽学校

初出：『佛教聖歌 第七回発表』 佛教音楽協會 1936年

管理番号：M1045

■ 創作の経緯

1935（昭和10）年、仏教音楽協会より「仏教聖歌」として発表（第7回）。作曲は協会からの委嘱によってなされたと思われるが、平井は後年、自作全11曲からなる『混声合唱曲集』（音楽之友社、1959年）を編むにあたり、この作品を手直しして収録している。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第4巻収録

底資料：『平井康三郎 混声合唱曲集』 音楽之友社 1959年

比較資料1：『佛教聖歌』 佛教音楽協會 1936年

比較資料2：『佛教聖歌 縮刷第一輯』 佛教音楽協會 1938年

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

衆会とは、たくさんの人びとが仏さまの前に相集い、礼拝することを意味しています。

一人ひとりのなりわい（世の業）は違っていても、老若男女のへだてを超えて、同信の人びとが集うことは大きな喜びです。ともに仏さまの光のなかにおさめとられ、み教えを聞き続けていくことの尊さ、楽しさを、この歌は表現しています。2番の詞に、「のりをきく たのしきつどい」とあるように、仏法に出遇えた深い喜びを声にのせていくことが大切です。

作曲の平井康三郎は、1910（明治43）年、高知県に生まれました。東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）器楽部でヴァイオリンを学んだ後、同校研究科作曲部を修了し、作曲家・指揮者として活躍しました。特に歌曲や合唱曲にすぐれた作品を遺しており、有名な《平城山》《九十九里浜》をはじめ、仏教讃歌では《ゆるされし》《親鸞聖人御誕生の歌》や、釈尊の降誕を讃えた大

作・交声曲《大いなる哉》などがあります。

この《衆会》は、1935（昭和10）年頃に作曲されました。作曲者自身が編纂した混声合唱曲集に、次のような解説がありますので、参考にしてください。

曲は衆讃歌（コラール）の形式をとっているから、和声の美しさを重んじるが、旋律の歌い方もレガートに美しく、強弱の発想に気をつけ、落ちついた深い表現をしていただきたい。

◆歌い方の注意

- ①冒頭に「Andante maestoso」という指示があります。「歩く速さのテンポで、おごそかに」と解釈してよいでしょう。
- ②しかし、あまり重々しくならないように。
- ③メゾピアノ（やや弱く）からメゾフォルテ（やや強く）、フォルテ（強く）へと移っていく、強弱の発想に気をつけて、歌をふくらませていきます。
- ④14小節目「ド#」を、6小節目「シ」と間違いやすいので要注意。
- ⑤8小節目と、16小節目のリズムの違いをはっきり意識して歌いましょう。
- ⑥16小節目の2分音符（3・4拍目）で思いきりクレッシェンド（だんだん強く）し、その勢いのまま、17小節目「きんぶつの」に入ります。喉を十分に開き、力強く歌ってください。
- ⑦18小節目のブレス（息継ぎ）直前の音が、短くならないように。ブレスはすばやくしましょう。
- ⑧20小節目の最後の音（付点2分音符）は、十分に胸を開き、上あごの軟らかい部分を上にあげるようにして、フォルテのままですっぱりと歌います。
- ⑨日本語のアクセントは、原則として単語のはじめにあります。「て」「に」「を」「は」などの助詞にアクセントがつくことは、ほとんどありません。参考にしてください。

◆用途

- ・いろいろな集いのはじまりに歌うと、心なごむことでしょう。
- ・法要の前に、雰囲気盛り上げるためにも使用できます。
- ・導師や調声人などの入場、結婚式での新郎新婦の入場、あるいは献華などにも利用できます。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 11（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第136号収録）を加筆・修正のうえ、転載。